文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

第14号／平成19年5月1日発行

文京の坂道 ―新坂と荒木坂― 2

御碑名彫刻師、井亀泉・酒井八右衛門について 4

本郷のお店情報 ―伊藤圭介の資料から― 5

「モノ」が博物館資料になるまで 6

平成18年度のあゆみ 7

表紙写真／江戸名所道戯尽三十八 小石川にしとみ坂の図 歌川広景画 安政６年（1859）

文京の坂道
–新坂と荒木坂–

武蔵野台地の東端に位置し、いくつかの谷に刻まれる文京区には、台地と低地をつなぐ多くの坂道があります。今回はそのなかから、小石川・小日向の台地より、通称“巻石通り”へと下る二つの坂道、新坂（春日二丁目７と８の間）と荒木坂（小日向一丁目１と４の間）について、坂名の由来や、史跡などをご紹介します。

坂名の由来〔新坂・今井坂〕

『御府内沿革図書』という江戸の地誌に所収の、元禄年中（1688 ～ 1704）の図を見ると、現在の新坂に該当するあたりに「酒井靱負佐」との表記があります。酒井家は若狭国小浜藩主で、図は、そこに屋敷があったことを示すものでしょう。しかしこの時点では、新坂を示すような道・坂道らしき表記はありません。少し時代が下る正徳５年～享保１年（1715 ～ 1716）の図になると、そこに「坂」の表記が見えるようになります。また嘉永・安政期（1848 ～ 1860）頃の切絵図では、そこに「シンザカ」と記されています。おそらく、正徳頃に坂道が開かれ、新しくできた坂道なので「新坂」と呼ばれるようになったのでしょう。

享保 20 年（1735）成立の『続江戸砂子』という地誌には「新坂　又今井坂と云、此所ハ酒井讃州侯の屋敷の旧地也、坂のうへ、蜂谷孫十郎殿やしきの内に兼平桜と号大木あり、これによつて今井坂と云か、来歴しらす」とあります。坂名を新坂とした上で今井坂の別名を記し、その別名由来を、坂上に兼平桜があったためかと簡単に触れています。

ところが『新編江戸志』という地誌を見ると、兼平桜を今井四郎兼平という中世の武将にちなむものとした上で、さまざまな資料を引きながら、新坂＝今井坂説は、『江戸砂子』･『続江戸砂子』の著者である菊岡沾涼（せんりょう）の「附会の説也」、つまり勘違いであり、今井坂はここではないとの主張がなされています。別名としての今井坂には異論が見られるようです。

『東都小石川絵図（部分）』安政４年（1857）

坂名の由来〔荒木坂〕

前出の『続江戸砂子』には「荒木坂　前方坂のうへに荒木志摩守殿屋敷あり、今は他所へかはる」と記されています。文政 12 年（1829）成立の『御府内備考』にも「高凡五丈程、幅二間二尺程、右坂之義は…里俗荒木坂と唱申候、尤右坂上に先年荒木と申御名前不知御旗本有之に付唱来候由に御座候」とあります。ともにこの二つの史料は、かつて荒木志摩守が住んでいたこと（屋敷があったこと）を坂名由来としています。

それについて、これら二つの地誌が発行される以前の『御府内沿革図書』、宝永２年（1705）・宝永６年・享保 11 年の図を確認すると、荒木坂上に該当する位置に「荒木志摩守」の名が見え、その後、天保１年（1830）の図になると、その名が消えています。『続江戸砂子』、『御府内備考』に見る坂名由来、「荒木志摩守」（屋敷）説を裏付けるものとなっています。

新坂にくらした徳川慶喜

徳川慶喜（よしのぶ）は、天保８年（1837）水戸藩９代藩主徳川斉昭の子として、小石川の水戸藩上屋敷に生まれます。その後、御三卿のひとつ一橋家を相続、将軍後見職などを経て、慶応２年（1866）徳川 15 代将軍となります。大政奉還を経て、明治以降は、権力とは距離を保ち、写真撮影をはじめ、多彩な趣味を専らとした姿が伝えられています。

その徳川慶喜が、明治 34 年（1901）以降、この新坂上となる旧小石川区第六天町（現、春日二丁目）にくらしたことは、現在よく知られています。

徳川慶喜家の家扶・家従（華族の家務などを行うもの）らによる慶喜家の日記（松戸市戸定歴史館所蔵）には、慶喜や家族らの外出、慶喜家への来訪者・贈答その他、慶喜家に関する事柄が１件ごと簡潔に記され、慶喜の足跡を知る上で、貴重な資料となっています。

その日記の明治 34 年 12 月 24 日を見ると「九時四十分御出門、御幌馬車ニテ小日向御新邸ニ御移転」との記述があります。それまで住んでいた巣鴨邸からの移転の様子を記すものでしょう。

さらに、移転から遡る同年８月１日を見ると「御幌馬車ニテ小日向御新邸江被為入」との記述があります。慶喜の行動と思われる同様の記述は、この時期より頻出し、移転する 12 月末にかけて、時にはほぼ日参ともいえる状況を伝えています。9 月 19 日には「御出門御徒歩ニ而小日向御邸へ」とあり、巣鴨邸より徒歩で第六天町まで訪れている様子が記されています。これらの行動の詳細は明らかではありません。しかし結果として終焉の地となる、この第六天町新邸に対する並々ならぬ思い入れを示すものではないでしょうか。

日記には移転後のことも記されています。「御徒歩ニ而江戸川辺御写真」（明治 35 年４月５日）、「御徒歩ニ而丸山町有栖川様御別邸へ鷺狩ニ御出」（同年８月 10 日）、「御徒歩ニテ御近傍御運動御写真機御携帯」（明治 38 年３月 12 日）、「御徒歩ニテ音羽辺へ御写真ニ御出」（明治 39 年３月 16 日）など、徒歩外出の記述もたびたび見ることができます。おそらくこの新坂や周辺の坂道も、カメラを携えた慶喜が上り下りしたことでしょう。

大正 2 年（1913）11 月 22 日、77 歳にて慶喜は死去します。翌日より、慶喜死去～葬儀までの記事が新聞各紙に大きく扱われます。『萬朝報』（大正 2 年 12 月 1 日）には、葬儀日の記事として「竹早町電車通りよりと、水道端より（慶喜邸）正門に至る間」が一時通行止めとなる混雑ぶりや、沿道に土下座する老人の姿などを伝えています。

小石川に生まれ、晩年を新坂上となる小石川第六天町に過ごし、小石川を歩き、この地で終焉を迎えた徳川慶喜、文京との縁が深い人物の一人といえるでしょう。

荒木坂にくらした松平容保

その新坂上慶喜邸から直線距離にして 100 m程西へ、そこに位置する荒木坂上に、元会津藩主・元京都守護職の松平容保（かたもり）が晩年を過ごしたことは、あまり知られてはいません。

松平容保は天保 6 年、高須藩主松平義建（よしたつ）の子として生まれ、会津藩主松平容敬（かたたか）の養子となり、その後 9 代藩主となります。幕末期には京都守護職に就任、動乱の京都治安対策にあたります。その後会津戦争では籠城戦を経験、会津藩も多数の犠牲者を出し、白虎隊の悲劇などが現在に伝えられています。

その容保が、荒木坂上にあたる第六天町 8 番地（現、小日向一丁目）にくらしたのは、明治 20 年代のこととされます。明治以降の容保については、日光東照宮宮司などを務めたこと、幕末～明治維新期における犠牲者への慰霊につとめたことなどが伝えられています。しかし第六天町でのくらしぶりなど、詳細は明らかではありません。

明治 26 年 12 月 6 日発行の『読売新聞』には、「老公」（容保のこと）の正三位昇叙が、長男容大（かたはる）と松平家家令により広告されます。そして同じ紙面に、12 月 5 日に容保が死去したこと、9 日に第六天町の自邸より出棺することなどが掲載されます。

「容保公薨去取調書」（会津若松市立会津図書館所蔵）には、発病から葬儀までの記述を見ることができます。それによれば、容保の葬儀が神式で行われること、3,200 余名の会葬者を数えたことなどが記されています。

また『会津会雑誌』（第 29 号、昭和 1 年発行）には、病床にあった容保に英照皇太后より牛乳が遣わされ、医師橋本綱常によりコーヒーを加えられ「服用」したというエピソードが山川健次郎（元会津藩士、物理学者、東大総長など歴任）により記されています。

会津松平家廟所（福島県会津若松市）には、「明治二十六年十二月五日、正三位松平源公於小石川第之正寝」と刻まれた容保の墓碑が静かに建っています。

容保死後、第六天町の松平邸には、同郷人の親愛・団結を目的とした、会津会事務局が置かれ、雑誌『会津会々報』が発行（大正 1 年創刊）されました。また会津からの修学旅行生が訪れることもたびたびありました。松平邸は、旧会津藩士や会津出身東京在住者ほか会津関係者の拠点となったようです。

徳川慶喜と松平容保

容保が死去したのは明治 26 年 12 月、慶喜が第六天町に移ったのは明治 34 年 12 月、両者がここで過ごした期間は重なりません。しかし幕末という動乱期、かたや将軍として、一方は京都守護職・会津藩主として未曾有の難局にあたったこの両者が、同じ第六天町でそれぞれの晩年をすごしたことは、意味深いものを感じさせます。

（東條幸太郎）

調査協力
会津若松市立会津図書館
松戸市戸定歴史館
若松城天守閣郷土博物館

おもな参考文献

『徳川慶喜公伝』渋沢栄一　龍門社　1918
『最後の将軍 徳川慶喜』松戸市戸定歴史館　1998
『会津松平家譜』飯沼関弥　1938
『紙碑・東京の中の会津』牧野登　日本経済評論社　1980
『松平容保公伝』相田泰三　会津郷土資料研究所　1992 再版

「東京市小石川区全図」（明治 31 年）より作成
第六天町 8 番地が松平邸、54・55 番地が後の徳川慶喜邸。坂道を示す矢印の先が坂下となる。

新坂（平成 19 年撮影）

荒木坂（平成 19 年撮影）

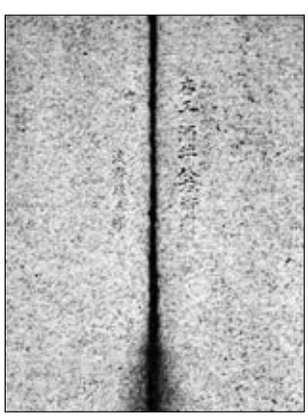
御碑銘彫刻師、井亀泉（せいきせん）・酒井八右衛門について

御碑名彫刻師とは

日本は気象条件などの要因から、歴史上、石造よりも木造の建物の利用されてきた割合が多いため、“木と紙の文化”などと言われます。しかしながら縄文時代の環状列石を始めとして、弥生時代の支石墓（しせきぼ）や、古墳時代の古墳の石室、穴太（あのお）積みに代表される中～近世の城郭など、大規模かつ高度な技術を必要とした石造物も、少なくはありません。

御碑名彫刻師。この名をはじめて耳にした方も多いことと思います。近年は江戸文化検定などに代表されるとおり、江戸時代の文化に親しむ動きが高まりを見せていますが、そうした江戸文化を支えた人々のなかには、多くの職種に携わる職人がおり※1、石工もその内の一つです。※2

石工の遺した石碑類のほとんどは、特定の人物や事蹟を顕彰するために設けられたことから、神社仏閣に多く存在します。このような石造物を制作することを専らとした人々を、作業の工程や種別などに応じて石工や石匠、または画像彫刻師、御碑名彫刻師などの名で呼んでいます。※3



酒井八右衛門銘の台座（部分）

井亀泉銘の「水道碑記」

技術を伝える　技術で伝える

江戸時代から昭和の初期にかけては、多くの石工が活躍していました。廣群鶴、宮亀年、田鶴年、窪世祥、中慶雲、井亀泉など。井亀泉とは、酒井八右衛門の屋号で、廣瀬群鶴の廣群鶴や、大窪世祥の窪世祥と同様、名字から１字をとり、更に吉祥句も織り込んで、中華風に漢字３字で通称（屋号）としたとされています。※4

これらの石工には、共通した特徴があります。

それは、血縁関係による相続よりも、優秀な技術をもつ弟子がいた場合、実子ではなく弟子を優先して家督を継がせていたことにあります。※5

そして主に口伝や体得によって技術を継承してきたため、関係する古文書類は、ほとんど遺されておらず、顕彰碑や墓碑など、身近な文化財としてありながら、詳細については不分明です。わずかながら高輪神社の石塀に、安政４年（1857）に記された「御府内石工拾三組」として、「谷中組、駒込・市ヶ谷組、四谷組、麻布組、伊皿子組、芝組、八丁堀組材木町、八丁堀組松屋町、深川組、本所組、浅草組、柳原組、筋違組」の名が挙げられており、これらの組合組織を中心として活動を展開していたことがわかります。

文京区にゆかりの深い酒井八右衛門の系譜等については、金龍山・浅草寺に寄進された燈籠の竿部分に詳細な碑文が遺されており、来歴を窺うことができます（燈籠自体は、経年変化や酸性雨による石材の劣化、地盤の沈下などの影響で倒壊する危険性が生じたため、平成18年９月に解体）。

以下に、概要を記しておきます。

酒井八右衛門の祖は、越前福井藩・松平家の元家老職を出自とし、寛政年間（1789～1801）に江戸に出てきたとされます。駒込肴町（現在の文京区向丘一丁目）に暮し、石工を始めたのは酒井八五郎、その子が初代の八右衛門となっています。

二代に養子を迎えて以降、八右衛門の名は四代まで続き、現在では石工を廃業しています。先の高輪神社の石塀が、関東大震災で破損した際に修理をしたのも、酒井八右衛門です。井亀泉から独立した弟子達の多くは「泉」の字を屋号とし、「保泉」、「喜泉」、「玉泉」、「和泉」、「龍泉」名義の石碑等が確認されています。また顕彰碑や墓碑を制作した際には「井亀泉」名義とし、鳥居などの石造物を制作した場合、「酒井八右衛門」の名を彫り付けるなど、制作する対象によって、名義を使い分けていたことが窺われます。

江戸文化を支えた石工の再評価

産業技術の近代化（工場生産）や技術革新、特に加工器具の発達と、外国産の廉価な石材の輸入などは、技術者の生産活動にも大きな影響を及ぼし、手から手へと、技術を伝えてきた石工達の世界にも、構造的な変化をもたらしています。個人経営の石屋や石材店は次第に減少し、墓石や石造物の加工にとどまらず、法事関係一切を担う株式会社の参入が顕著な傾向としてみられます。

職人に関わる研究においても資料の少ない分野、例えば黒鍬者（くろくわもの）などについては、ややもすれば等閑視されがちでもあり、加えて石工の系譜や技術に関する基礎資料が失われつつある今、資料の収集に努めてゆく必要があります。

その技術に関わる事柄は民俗学、美術史学的な立場から、そして石材の入手経路や加工した石造物の納入先等（寺社その他）の分布域のあり方は、流通経済史的な側面からと、石工に関する研究は、個人技術者としての職人の活動実態について、多くの示唆を与えてくれるものと考えられます。

関係資料の調査成果については、今後の当館の企画展示等において紹介してゆきたいと考えています。

（加藤元信）

※1 乾 宏己　1974「江戸の職人」『江戸町人の研究』第３巻　吉川弘文館
〃　1996『江戸の職人　都市民衆史への志向』吉川弘文館
※2 黒川真頼著・前田泰次校註 1974『東洋文庫 254 増訂工芸志料』平凡社
※3 嘉津山 清　2000「本門寺の石経碑その他　石匠窪世祥について」『大田区立郷土博物館紀要』第 11 号 大田区立郷土博物館
加藤 勝丕　1995「北区内所在廣群鶴篆刻碑調査報告」『文化財研究紀要』第８集 北区教育委員会
※4 加藤 勝丕　1997「御碑銘彫刻師廣群鶴のこと」『ＭＵＳＥＵＭ』547
※5 谷根千工房　1995「廣群鶴と谷中の石屋」『谷根千』其の四十二
〃　2007「其塔碑は即ち魂魂の憑る所」『谷根千』其の八十六
※その他に参考としたもの
福岡 直子　1997「雑司が谷霊園の開設にともなう地域社会の変化-農家の移転と石材店・生花店の集住をめぐって」『年報』第 11 号　豊島区立郷土資料館
〃　2005「石にたずさわる人と技-雑司が谷・霊園周辺の石屋」『かたりべ』78　豊島区立郷土資料館
〃　2005「石はまちのなかで生きている-石質や石工名をみてみよう」『かたりべ』79　豊島区立郷土資料館

本郷のお店情報
–伊藤圭介の資料から–

幕末から明治に活躍した、日本最初の理学博士・伊藤圭介は、当館から目と鼻の先、本郷真砂町 14 番地に、明治 4 年（1871）頃から 99 歳で亡くなる 34 年まで居住しておりました。伊藤圭介は、シーボルトに入門したことなどから、本草学史上では有名な人物です。圭介が収集した資料は、出身地である名古屋の東山植物園や名古屋大学にも多くのこされていますが、東京では国立国会図書館伊藤文庫に約 2000 冊にものぼる資料があります。内容は、本草・博物学分野が主体ですが、今回は『植物図説雑纂』という書物から、文京の店舗情報を紹介したいと思います。

『植物図説雑纂』は、全 254 冊にものぼる大部なスクラップブックで、伊藤圭介と孫の篤太郎が、日本の植物図譜を編纂するための基礎資料として集めたものです。現在では散逸してしまった美しい植物画帖も貼り込まれており、国立国会図書館でも貴重書に指定された重要な書物です。私自身が当初から文京のお店を探していたわけではないので、実数はもう少し増えると思いますが、本書のなかに、下表のとおり 17 例を発見しました。

ナスをかたどった広告（部分）
『植物図説雑纂』
巻 112
（国立国会図書館蔵）

植物研究目的で集めたなかに無関係のものも混じっているように思えますが、葡萄酒の広告は、植物としてのブドウを多くスクラップした冊に、糀漬けは商標にナスをデザインしてあるのでナスの冊に貼付されていました。また、霊芝の冊には、これをめぐらしたデザインの饅頭店の広告が貼られています。

表題等	植物	住所	店・店主	巻
告草	霊芝	東京本郷区本郷三丁目十番地伊豆倉横町	清水庫三郎	100
生蕎麦売出し広告	蕎麦	本郷区真砂町三十七番地	常盤屋豊治郎	101
糀つけ	茄子	湯島切通し坂下	中川屋宗兵衛	112
糀づけ	茄子	湯島切通し坂下	中川屋宗兵衛	112
糀づけ	茄子	東京湯島切通シ町	中川屋宗兵衛	112
くすり飴取次所	不明	駒込富士前	美嘉和家	119
ざぜん豆佃煮	豆	本郷四町目十四ばん地	近江屋富澤商店	152
賣出シ御披露	豆	東京本郷三丁目拾六番地	浅草茅町支店 玉木屋三次郎	153
加利福尼亜葡萄酒大販売広告	葡萄	東京本郷区春木町三丁目廿二番地	浜野商店	164
	昆布	本郷区本郷通二丁目	若橋屋売場	169
	昆布	本郷貳丁目	若橋屋	169
千歳海苔 大販売所	海苔	本郷区弓町二丁目三番地	勧工場萬有館内海苔商 吉川支店	177
東海名産御海苔	海苔	本郷参町目	若橋屋商店	177
西洋御料理代（領収書）		本郷区真砂町拾番地	弥生亭	184
図章（印章店）		東京本郷区湯島切通坂町七番地	畑河支店	187
大名物 あは餅	粟	本郷二丁目	澤屋庄兵衛	189
あは餅	粟	東京本郷		189

告草（饅頭店清水庫三郎の広告）
『植物図説雑纂』巻 100
（国立国会図書館蔵）

このようなデザインとしての面白さのほかに、当時どんな商品が売られていたかもわかります。明治 42 年に、おそらく伊藤篤太郎が、真砂町 10 番地にあった西洋料理店「弥生亭」で、スープ・カキフライ・チキンロース（ト）を食べたこともその領収書からわかります。また、次に掲げるのは、本郷にあった玉木屋の販売広告の全文です。

賣出シ御披露
各位益御清栄奉恐賀候。随而弊店義、御蔭を以て日増に繁栄仕り難有仕合ニ奉存候。附而は今般御礼之為賣出し仕候間、相かはらず御引立御用向之程澤山被仰付度、偏に奉希上候也。

甘露煮 ざぜん豆　　極製 つくだに
梅が枝でんぶ　　桜花漬
梅ひしほ　　梅ぼし
さらさ梅　　甘露煮 あんず
てつかみそ　　ゆかり
さくらみそ　　海苔佃煮
あられみそ　　ゑく瓶詰
ゆたう味噌　　しそまき
きやらぶき　　味つけ海苔
眞製肴物 精進つくだに 鶏肉美醤

六月 十一日 十二日 東京 本郷三丁目拾六番地

浅草茅町支店 玉木屋三次郎
雨日麁景呈上申候
うちみかうやく
浅井萬金膏 大販賣 壱枚壹戔

このお店は、豆を中心とした佃煮屋であることがわかりますが、最後の 2 行によって、膏薬も販売していたとわかります。また「雨日麁景呈上」とは、雨の日に来店したお客様には、粗品を進呈いたしますという意味で、現代でも雨天割引など似たようなサービスは存在します。

ここに紹介したものは、『東京買物独案内』などに掲載がある有名店ではありません。しかし、店のたたずまいさえ想像できる具体的な資料は、地域住民としての特徴がよく出ています。伊藤圭介は、博物学的関心をもって商品ラベル等を集めたのであり、同門の博物学者・田中芳男も同じ類のスクラップブックをのこしています。この 2 人は、前近代的で高等教育システムから排除されたという見方もあるようですが、失われた近世～近代の生きた情報を伝える人物として、資料を重視する博物館学芸員にとってはありがたい存在です。

（平野　恵）

「モノ」が博物館資料になるまで
–文京ふるさと歴史館における「収集・保管」活動–

一般的に博物館の機能は、「収集・保管」「調査・研究」「展示・普及」の大きく3つに分類することができます。そのうち「収集・保管」は、博物館活動に必要不可欠な資料を集め、後世に伝えていくという、いわば博物館のスタート地点であり、根幹を成すものです。どのような資料を収集するかによって、その館の性格や方向性が決まっていくといっても過言ではありません。

さて、文京ふるさと歴史館は、区立の博物館(※)として、平成3年（1991）4月に開館以来、文京区の歴史・文化にかかわるもの、区民の生活をあらわすもの総てを収集対象として、約2万件を収集してきました。ここでは当館の場合、収集された「モノ」が、「博物館資料」となるまでに、どのようなプロセスを経ているのかを紹介したいと思います。

（1）受入

受入方法は、主に購入、寄贈、寄託、借用、ほかに採集、管理換え、制作などがあります。寄託は、常設展示や調査研究に必要な資料を一定期間（当館の場合2年更新）預かる制度で、所有権の移動はありません。借用は、企画展示などの目的で比較的短期間預かる制度です。いずれも、決められた方法での事務処理、書類のやり取りをします。

ここ5年間の主な資料受入件数

年　度	13	14	15	16	17
購　入	101	85	80	68	71
寄　贈	62	40	40	20	23

※単位：件（1件で複数点の場合あり）、年報掲載数

（2）整理（データ・情報の集積）

受け入れた資料は、基礎的な情報・データ集積、写真撮影をし、鉛筆で表書きした資料用封筒（中性紙製）に入れます。記入する内容は、受入番号、資料名、点数、寸法、備考（作者、発行元等）、年代、受入方法、入手先、受入年月日、収納場所、担当者名等です。袋に入らないものは資料札をつけたり、大きいものはコンテナ（プラスチック箱）におさめたりもします。

またその情報はコンピュータ上のシステム「文京文化財検索」に入力され、調査・研究に役立てたり、順次展示室に置かれたパソコンでの公開を進めています。

さて、ここで重要なのは、どれだけ資料に付随する情報を集められるかということです。特に寄贈資料の場合、寄贈者からうかがった話＝聞き取り情報が貴重になります。誰が、いつ、どこで、どのように使っていたか（あるいは作られたか）、持ち主はどのような人物か、生没年は…などなど。時にはかなり立ち入ったことをうかがうこともありますが、それが個々の資料の性格や価値を決定し得る重要な要素となります。またきちんと記録しておくことが、他の学芸員、そして将来に引き継ぐために必要不可欠な行為です。単なる「モノ（物体）」に「コト（情報）」が付随することこそが、「博物館資料」になる第1歩だからです。

その結果「この世には同じ『モノ』はひとつとして存在しない」ということが言えます。例えば同じような火鉢が2つあるとしましょう。一方は、寄贈者が第二次世界大戦の空襲のとき防空壕に抱えて逃げたもの。もう一方は戦後も居間で使われ、その後金魚鉢に転用されたもの。大きさや色形が同じでも、「モノ」が背景に抱える来歴によって、まったく性格の異なる資料となり、それぞれ違った研究対象、異なる場面での展示に使用されることになります。

なお、他の文献を使って調べたり、古文書の内容を解読するなど、「調査･研究」の範疇に入る仕事は、その時にやり切れなければ後日改めて詳細に進めるか、企画展・特別展の準備段階でまとめて行われることになります。

（3）配架・保管

燻蒸（薬剤による殺虫･殺黴処理）後、資料は収蔵庫へ運ばれます。館内に2つある収蔵庫のうち、特別収蔵庫は空調により、温湿度が一定（20℃、55～60%）に保たれているので、主に紙製の資料（古文書、絵画、地図、典籍等）など、より安定した環境での保管を要求される資料を収納しています。地下収蔵庫には、民具・生活資料、考古資料等を収蔵しています。それぞれ受入年度、あるいは資料の種別によって分類、配架されています。この場所で文京区の貴重な財産として未来永劫保存されるとともに、常設展示やさまざまなテーマで開催される特別展・企画展、調査・閲覧などのために、静かに出番待ちをすることになります。

収蔵をめぐる課題

開館17年目を迎えた現在、収蔵資料をめぐる課題も山積するようになってきました。

まずいちばんの悩みは、収蔵スペースが確保できなくなっていることです。地下収蔵庫の棚はほぼ満杯、大型資料が通路にも置かれ、特別収蔵庫も引き出しが不足し、文書箱が棚に置ききれない状況です。館外に数か所ある収蔵スペースも満杯に近く、また離れた場所にあるため効率的に活用できず、結果として受入制限を余儀なくされるという問題が生じています。既に類似資料を受け入れていたり、大型で収蔵場所がない場合、せっかくの寄贈申し出も断らざるを得ない状況にあります。「この世に同じ『モノ』はひとつとして存在しない」はずなのに、この現状にはとてもジレンマを感じています。

また、もうひとつの大きな課題は、資料整理の遅れです。限られた人数で、展覧会など年間の担当事業を進めながら大量の資料を整理する必要がありますが、どうしても期日の決まった事業が優先し、一括で受け入れた資料の目録化や、更に一歩進んだ整理・分類などのために割く時間がなかなか取れないということです。

上記のような事情もあり、今年度は展示事業（企画展・特別展･収蔵品展）を休止し、館内･収蔵庫の大規模な整備、資料調査に力を注ぐことになりました。効率的な配架によって収蔵スペースを確保し、また調査のなかで再発見された資料を常設展示や今後の企画展に活かしていきたいと考えています。1年間みなさまには企画展等で資料をお目にかける機会が減ってしまいますが、ご理解をお願いするとともに、今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

（川口明代）

※法的位置づけとしては博物館法に定められた「登録博物館」ではなく、博物館類似施設です。

平成 18 年度のあゆみ

文学コーナーミニ展示

「窪田空穂と『亡妻の記』」

◆ 4 月 12 日（水）～ 8 月 31 日（木）

収蔵品展

「八犬伝で発見！-江戸庶民の生活文化-」

◆ 4 月 29 日（土）～ 6 月 4 日（日）（延べ 32 日間）　入館者数……3,244 人

収蔵品展

区民大学･文京の歴史講座

「江戸の食文化」（全 3 回）

◆ 6 月 11 日（日）「アジアから見た江戸の食文化」／原田信男氏（国士舘大学教授）
参加者数……81 人

◆ 6 月 25 日（日）「江戸の料理文化-料理本と料理屋-」／原田信男氏（国士舘大学教授）
参加者数……70 人

◆ 7 月　2 日（日）「江戸の食べ物屋」／飯野亮一氏（食文化史家）
参加者数……61 人

歴史講座

小・中学生のための歴史教室

「調べよう-夏にはたらく道具たち-」

◆第 1 回　8 月 2 日（水）　参加者数……10 人

◆第 2 回　8 月 4 日（金）　参加者数……15 人

特別展

千代田・新宿・文京三区共同企画

「徳川御三家江戸屋敷発掘物語-水戸黄門邸を探る-」

◆ 10 月 21 日（土）～ 12 月 3 日（日）（延べ 38 日間）
入館者数（講演会・庭園めぐり参加者含む）……5,752 人

◆記念講演会　11 月 11 日（土）会場：男女平等センター
「小石川後楽園の庭園構成」／藤井英二郎氏（千葉大学教授）　参加者数……80 人

◆庭園めぐり

① 11 月 16 日（木）　六義園周辺　参加者数……27 人

② 11 月 22 日（水）　小石川後楽園周辺　参加者数……30 人

③ 11 月 29 日（水）　旧岩崎邸庭園周辺　参加者数……32 人

◆展示解説　10 月 26 日（木）、11 月 5 日（日）、11 月 17 日（金）／当館学芸員

特別展

企画展

「文京・まち再発見 2　近代建築 街角の造形デザイン」

◆ 2 月 10 日（土）～ 3 月 18 日（日）（延べ 32 日間）
入館者数（フォーラム参加者含む）…2,901 人

◆展示解説 2 月 18 日（日）、22 日（木）、3 月 4 日（日）、6 日（火）／当館学芸員

関連イベント（1）

「まちかどの近代建築写真展ＩＮ根津」

◆ 2 月 10 日（土）～ 17 日（土）　会場：日本基督教団根津教会
主催：日本建築学会関東支部歴史意匠専門研究委員会データベースワーキンググループ

関連イベント（2）

「第 174 回　江戸東京フォーラム　第 2 回 シリーズフォーラム 東京の地域学を掘り起こす」

◆ 3 月 18 日（日）　会場：男女平等センター　参加者数……76 人
地域資料としての「近代建築」／司会：森まゆみ氏（作家・谷根千工房主宰）
報告：川口明代（当館学芸員）、北田建二（当館専門員）

企画展

史跡めぐり

◆第 1 回　6 月 6 日（火）「司馬遼太郎の『街道をゆく 本郷界隈』を訪ねて」　参加者……39 人

◆第 2 回　10 月 6 日（金）「目白台の名建築を訪ねて」　参加者……21 人

◆第 3 回　3 月 2 日（金）「駒込・千駄木地区の近代建築を訪ねて」　参加者……38 人